

## 2017年3月期第2四半期 決算説明会 質疑応答要旨

日時：2016年11月1日（火） 10:00~11:00

場所：ベルサール八重洲

お断り：この要旨は、決算説明会にご出席になれなかった方々の便宜のためにご参考として掲載するものであり、説明会で話したことの一字一句を書き起こしたものではありません。当社の判断で簡潔にまとめさせていただきました。ご了承ください。

- Q. 期初から半導体・液晶向けの需要のスローダウンを前提にしていたと思うが、上期の電子産業向け装置の受注は期初想定どおりのスローダウンか。下期に向かっては、弱含みなのか横ばいなのか。
- A. 全体に期初想定どおりだが、半導体・液晶・電子部品ともに顧客によりばらつきが出てきている。下期に向かっては、液晶は強含み、電子部品はばらつきがあると見ている。
- Q. 上期の電子産業向けハードの受注高・売上高における半導体：液晶：電子部品の比率を教えてください。
- A. 比率については、受注高で3：4：3、売上高で3：6：1。
- Q. KWSSについて、来期業績への貢献はあるか。なぜ今やり始めたのか。採算面はどうか。
- A. 2016年度の契約は12台、契約期間の総額で2億円強になる見込み。これまで商品開発は行ってきたが、ここに来てセンサー類はじめ完成度を上げて拡販できると判断した。収益性については、契約条件によっては大型装置より良いものもある。
- Q. 電子産業向け装置の通期の営業利益計画が26億円下方に修正されたが、超純水供給事業、海外事業、販管費など要因の内訳を教えてください。
- A. 個別の内訳は言えないが、超純水供給事業の売上高は36億円下方修正しているので、相応に利益影響はある。販管費は円高による目減りもある。海外事業も下方修正はしたが、超純水供給事業の利益減少を補うような動きはしている。
- Q. 海外水処理薬品の地域別の伸び率の上期実績と通期計画を教えてください。また、KEAGはどうだったか。
- A. 円価ベースで、上期はアジアが7%減、北米が16%増、EMEAが12%増、その他地域が22%減。通期はアジアが9%減、北米が13%増、EMEAが2%減、その他地域が6%減。KEAGの状況については、本年4月1日に元からあったKEGと合併し新たにKEGとなっているため個別には開示できないが、期初計画より売上高で20億円程度下振れし、(のれんと技術関連資産償却後の)営業利益で若干の赤字に振れる見通しを持っている。
- Q. アジアにおける水処理薬品の販売状況について、現状と来期の見方を定性的に教えてください。
- A. アジアについては、中国と東南アジアが中心になるが、第2四半期あたりから減速し、第3四半期も同様な動きとなっている。来年も大きく伸びる見通しは持っていない。

- Q. 一般産業向け装置の収益性が改善する兆しが見えないし、スピード感もない。今後、改善を期待していいか。
- A. 一般産業向け装置の収益拡大は喫緊の課題と認識している。今、受注と生産の両面から管理を徹底している最中であるが、この取り組みで成果が上がらなければ、事業の体制変更を含めて考えていく。
- Q. 土壌浄化では利益は出ているか。一般産業向けの中で利益が出ていないのは何か。
- A. 土壌浄化で利益は出ている。現在、営業利益ベースで黒字になるよう取り組んでおり、改善している。利益が出ていないのはコンビナート向けの装置（ハード）売りの部分であり、ここは厳しい状況が続いている。
- Q. 海外の電子産業向け装置に関して、収益改善見通しを減額した要因は何か。今後のメンテナンスの伸びの見通しについても教えてほしい。
- A. 当初、大型装置の納入も増えたので、それに連れてメンテナンスの伸びによる収益性の改善も予想していたが、地域によっては装置納入が高収益のメンテナンスに結びつかなかったり、メンテナンスの需要が顧客の業況に大きく振られたりして、当初予定ほど伸びなかった。大型装置の採算もまだまだ厳しいのも事実である。
- Q. 海外の電子産業向け装置全体では、営業利益にプラスで貢献しているか。
- A. 今、プラスに貢献できるよう取り組んでいる。
- Q. 上半期のシャープ向けの売上高の実績はどのくらいになったか。
- A. 連結売上高の10%未満になったので、開示対象から外れた。
- Q. 超純水供給事業の契約変更は何カ月分で30億円のマイナスなのか。下期分だけか。
- A. 上期も若干入っている。
- Q. 来期の超純水供給事業の売り上げについては、どのような見方をしたらいいか。
- A. 契約変更は契約期間を延ばす形で単年度の売り上げを減額した。来期はこの影響も残るため売り上げは若干減る。その後の増額に向けて新規投資に取り組みたい。
- Q. 今回の超純水供給事業の契約期間の変更は、過去にあった契約期間の延長とどう違うのか。
- A. 過去にあったものと同じ。契約期間を延長して当社の収益を確保した。
- Q. 超純水供給事業の契約変更について、再度見直しの可能性は残っているのか。
- A. 可能性については断言できないが、現在の状況は顧客との合意の上でのことなので、これ以上の変更はないと考えている。
- Q. 超純水供給事業の期初計画の増加分の下方修正は、収益性が落ちているのか、海外が増えている一過性の要因なのか。
- A. 期初計画との差の6億円は顧客稼働率が思ったより低かったことによる変動料金の差なので、収益性の低下ではない。超純水供給事業は、ハードルレートを設定して投資の採算性を見ているので、収益性に変更はない。

- Q. 超純水供給事業の設備投資計画の増額は、国内 NAND フラッシュ向けか。  
A. 主なものは海外案件だが、国内で小さなものは半導体・液晶ともにある。
- Q. 海外の超純水供給事業の追加とは、SK-hynix 向けのプレスリリース以上の追加ということか。  
A. プレスリリース以上の追加があったということ。
- Q. 来期の超純水供給事業向けの設備投資のイメージは今期よりも増えていくか。それとも頭打ちのイメージか。  
A. 有機 EL 関連の投資の可能性もあるし、海外での新規案件も動いている。そういったものが取れれば、今期よりは増えていくのではないかと。
- Q. 通期の水処理装置事業の営業利益計画を、期初計画から 25 億円落としているが、超純水供給事業の売上高計画の 36 億円の減額だけで説明できるのか。  
A. 海外の水処理装置の収益性が、期待していたほど回復してこなかった。新たに不採算案件が発生してきたということではない。

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により異なる可能性があります。